

- P1~3 企画展 戦争と大津
—激動の時代と子どもたち—
- P4 ミニ企画展 戦争と大津
—戦後の市民生活—
ミニ企画展 八所神社の古文書
- P5 学芸員のノートから
- P6 収蔵品紹介

大津歴博 だより

第64回企画展

戦争と大津 —激動の時代と子どもたち—

平成26(2014)年7月19日(土)～8月31日(日)



青い目の人形たち 左から甲賀市立甲南第二小学校メリー、大津市立平野小学校ジェーン・ハイランド、彦根市立稲枝北小学校マリオン・L・スナイダー、日野町立日野小学校マリオン・ベイビー。背面は平野小学校の人形のパスポート。

昭和2年(1927)3月、アメリカから日本の子どもたちに、1万2,700体を超える「青い目の人形」が贈られました。日米親善の願いのこもった人形たちは、日本の雛祭りに合わせて贈られたのです。幼稚園と小学校では、人形の歓迎会が盛大に催されました。そして同年、日本からはアメリカのクリスマスに合わせ、「答礼人形」58体を贈ったのです。しかし昭和16年、日米間で戦争が始まると、日本では、敵国からの人形だとして、多くが壊されてしまいました。滋賀県には当時135体余が配られたのですが、戦後まで生き残った人形は写真の4体だけです。この人形たちは、平和の大切さを私たちに訴えかけているようです。今回の企画展は、この青い目の人形の紹介から始まります。

企画展

戦争と大津 —激動の時代と子どもたち—

平成26年7月19日(土)～8月31日(日)

戦前から戦後にかけての激動の時代を、
子どもたちは、どんな思いで見つめていたのでしょうか。

昭和6年(1931)の満州事変以来、15年にわたって続いた戦争の時代が、同20年(1945)の8月15日、日本の敗戦というかたちで終わりを告げました。この日の正午、昭和天皇による「玉音放送」がラジオから流れ、日本国民は戦争が終わったことを知らされたのです。その日から本年度、69回目の夏を迎えます。終戦の年、国民学校の初等科6年だった子どもたちは、今年で80歳を迎えられたこととなります。そして、戦争に行かれた方々の多くは90歳を過ぎておられるのです。戦争体験者の方の高齢化が進み、戦争そのものの記憶が風化しようとしている現在、当時の「記録」と「記憶」を後世に残し、平和の尊さをメッセージとして発信しつづけていくことが大切だと思われまます。

今回の企画展「戦争と大津」でとりあげようとする時代は、戦時中のできごとばかりではなく、終戦後、アメリカ軍を主力とする占領軍が大津に進駐してきた時期までを対象とします。そして、その時代を生きた子どもたちの、日常生活や学校教育の移り変わりに焦点を当て、第1部を「戦時下の子どもたち」、第2部を「戦後の学校教育」として展示を組み立てました。

第1部は、昭和2年(1927)、日米親善の証として、アメリカから日本の子どもたちに贈られた「青い目の人形」の紹介から始めます(表紙の写真と文を参照)。しかし、その頃すでに学校では、紀元節や天長節などの祝祭日での「教育勅語」の奉読と「御真影」(天皇・皇后の写真)への拝礼が義務とされており、満州事変勃発の2年後、昭和8年(1933)の第四期国定教科書には「ススメス、ヘイタイススメ」の文章が、行進する兵隊の絵とともに登場しました。子どもたちは「銃後」を支える「少国民」と呼ばれ、日常生活にも、戦争物の子ども茶碗や兵隊人形、少年兵の活躍を描いた少年雑誌、「鬼畜米英」をテーマとした紙芝居などが目立つようになったのです。

続いて第2部では、戦後のGHQによる教育制度の改革に焦点を当てて展示します。終戦直後、文部省の指示により、教科書で戦争に関する部分に墨を塗って抹消することが、子どもたちの最初の仕事でした。そして新制教育としての、六・三・三・四制の導入。教育の民主化を目指す「実験学校」など、めまぐるしい社会の変化と子どもたちの生活ぶりを、さまざまな資料によって紹介します。

◆インフォメーション◆

主催/大津市・大津市教育委員会・大津市歴史博物館・京都新聞

後援/NHK大津放送局・BBCびわ湖放送・エフエム滋賀

観覧料/一般:400円(320円) 高・大学生:300円(240円) 小・中学生:無料

※()内は前売、15名以上の団体、市内在住の65歳以上の方、市内在住の障害者の方の割引料金(証明書等をご提示ください)。

休館日/月曜日(7月21日を除く)、7月22日



答礼人形「ミス・滋賀県」絵はがき 本館蔵



陸軍少年飛行兵学校在校生に贈られた日の丸の寄せ書き
入校者はまだ14歳の少年だった 個人蔵



瀬田国民学校絵日記 本館蔵
高等科生徒の勤労動員を見送る下級生



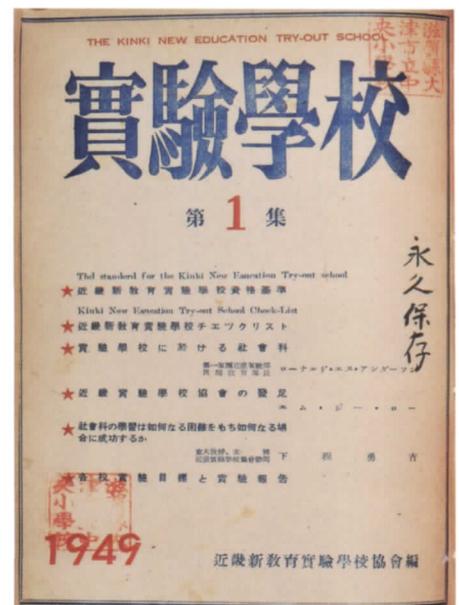
第四期国定教科書『小学国語読本』巻1 昭和8年 個人蔵



戦時中の少年雑誌『少国民の友』 昭和18年
個人蔵



戦時中の子ども茶碗(高射砲)
KIN コレクション



『実験学校』第1集 昭和24年
大津市立中央小学校蔵

戦争と大津 —銃後の市民生活—

企画展「戦争と大津」第2会場

会期：平成26年7月15日（火）～8月31日（日）

戦場で戦う軍隊を後方で支援することから、内地の生活は「銃後」と呼ばれました。「ほしがりません勝つまでは」などの標語は、銃後の市民生活を象徴する言葉として使われました。本展では、物資不足に対応するための衣料切符や味噌・醤油の購入券、兵器製造のための金属類供出奨励ビラや宣伝用の紙芝居、燈火管制などの仕方を図解した防空演習時の配布物や召集令状（赤紙）など、さまざまな資料で、きびしかった銃後の市民生活を振り返ります。



出征風景を描いた紙芝居 昭和16年 本館蔵



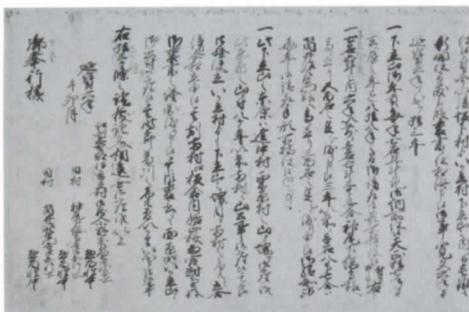
燈火管制の図解 昭和12年 本館蔵

大津の古文書8 八所神社の古文書 —近江国伊香立の鎮守—

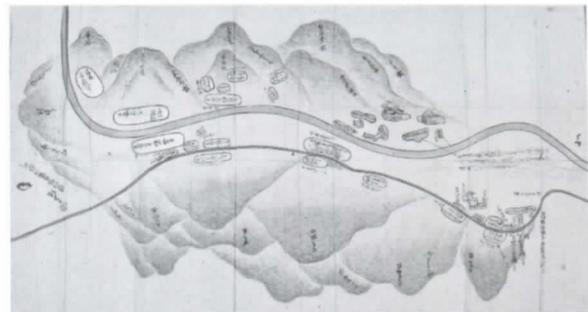
会期：平成26年9月2日（火）～10月13日（月・祝）

大津市の北部、比叡山と比良山に接する伊香立地域。その伊香立の総鎮守である八所神社には、鎌倉時代から江戸時代にかけての古文書が多く伝わっています。特に隣接する葛川との境相論に関する文書群は、延宝6年（1678）の葛川との相論の際に整理されたもので、古いものは元応2年（1320）の年紀があり、関係する全13通が市指定文化財に指定されています。

今回、鎌倉時代から戦国時代の古文書だけではなく、調査によって新たに発見された江戸時代の古文書・古絵図も展示し、地域の人々によって現在まで大切に保存されてきた歴史を紹介します。



伊香立村総百姓下立山相論対決証文口上書
延宝6年（1678）4月（末尾部分）市指定文化財



伊香立下立山絵図
寛文6年（1666）11月15日

ただ今、三井寺の仏像、仏画の調査と撮影を実施中

歴史博物館では、市内の神社仏閣に伝来する様々な宝物の調査を日々進めています。最近行っているのが園城寺（通称「三井寺」。以下、三井寺）の仏像と仏画の調査です。本年は、三井寺を再興した智証大師円珍の生誕 1200 年と節目の年にあたることから、当館ではこの秋に「三井寺と大津町の仏像」展の開催を予定しています。調査はその下準備をかねて悉皆的に行っています。

調査では特に未指定のものを優先的に行っています。そもそも三井寺に一体何があるのかという全容を把握することが先決で、しかも未指定品は写真が無いものが多いためです。写真がないと図録をつくることも出来ません。そのうえで写真入りの目録台帳作りも並行して行っています。

特に仏像の写真撮影では、正面だけでなく、左右それぞれ斜め、側面、斜め後ろ、背面と、少なくとも 8 方向と、寝かせての像底、そして頭頂からというように、全図だけでも 10 カットの撮影を行っています。加えて、頭部も正面、両斜め、両側面、背面と 6 カットは必要で、さらに彩色や構造の細部の撮影となると、気になる所は全て撮るので、多いときは 200 カットを超えることもあります。ですから 1 体の撮影だけで 1 日が終わるときもあります。皆さんが目にする図録やポスターの写真はわずか 1 カットだけですが、その裏では沢山の写真が長時間にわたり撮影されているのです。

今度の展覧会図録では、このようにたくさんの中から選ばれた写真が掲載される予定です。その写真を見て、我々が悪戦苦闘しながらも楽しみながら、なめまわすように撮影している姿をぜひとも想像してみてください。尊像に対するなみなみならぬ愛着や執着心、慈しみが 1 枚の写真にこめられているのです。そして膨大な量の写真をもとに、図録の解説や展示キャプションは執筆され、それら様々な情報が、尊像の現物とともに後世に残されるのです。

（本館学芸員 寺島典人）



右側面



左側面

木造不動明王坐像（唐院・長日護摩堂安置） 園城寺蔵

